大久保貴裕（岩手県盛岡市）

タイトル「未来への夢～日本一の弁士を目指して～」

未来の自分へー。「今、あんたはどこにいる？きっとまたどこかの壇上に立っているんだろうね？そこでは会場中の大きな拍手を浴びているの？でも、会場をつつむ、止まない拍手なんて……そんなもの、あんたにはいらんよな？」

俺には「夢」があった。それは誰もが認める日本一の弁士になること！何千もの人が集まる大ホールの壇上に立ち、人々の心を揺り動かすような弁論を展開し、会場中の拍手をもらう。中学2年の秋、国語の先生に誘われて何気なく参加した市の弁論大会。今まで勉強といい、部活といい、周囲から劣等生という視線を受けていていた俺にとって、あんなにも多くの人の視線と拍手を受けるというのは、味わったことがない最高の快感だった。それから4年間、俺は岩手県中の壇上に立ち続けた。そして高校最後の弁論県大会で優勝し、ついに「夢」を叶えるチャンスと臨んだ全国高総文祭。もはや自分にかなう奴なんていない。この4年間のうちにそんな確信がどこかにあった。だが、審査の結果は……全国最下位。会場からの帰り道、電車に乗った瞬間涙が溢れてきた。

人を感動させるって一体何？俺には分からなかった。今までの弁論はただの自己満足だったのか？車内で俺はひたすら泣いていた。その涙が枯れた夜、会場にいた京都の高校生からメールが来た。「大久保君の弁論よかった！あの言葉心に残ってる」確かに俺の弁論は点数にはならなかった。会場中を感動させることも出来なかった。だが、少なくとも1人の心は確実に動かすことができていた。それを知った途端、また涙が自然と溢れてきた。この日の俺は泣いてばかりだった。

「あの日の2つの涙。今もあんたは忘れていないよな？会場を揺るがすような大きな拍手なんかなくてもいい。『会場にいるたった1人にでも心に伝われば俺の弁論は大成功！』誰か1人だけでもその人の人生を変えられるような、その人にとっての日本一の弁論、あんたは今壇上で語っているよな？」

Copyright(C) THE JAPAN WOOL TEXTILE CO., Ltd. All Right Reserved.